

社会認識 分散会 討議記録

(司会者)

昨日の報告は、京都の方が5年、宮崎の方が15年という長いつきあいの中での関わりについて報告されました。ただその時どの位置でつきあっていくかが問われました。つきあい続けて共に生きていく中から見えてくるものが在るはずです。子供や親の生活を知ること、息づかいを肌で感じることで、ここに部落差別の問題をどう持って行くか。見えなければ見えるようになる力をどう自分に作って行くか、ここに輝き合う仲間作りの日々があります。参加者のほうから、「怒りが見えなかった、怒りがほしい。」という発言がありました。やはり自分が部落差別と出会いそこで学ぶ中でどのように変わっていったか。自分の中で部落問題がどのような位置を占めるようになったのか。そういうようなことをきちっと出してほしいという指摘だったと思います。それから人の子ともと関わる中で自分が学校を背負ってその子とつきあっているという姿が見えたという発言があります。親の立場から、ムラの子じゃなくて周りの子が気になる。周りの子どもたちとどう学んでいるのか、そう言ったところが聞きたい。そういう指摘もあります。それから個人の考えは分かるがそれでは広がりにも何にもならない。関わっていく態度を主張したい。そういう指摘もあります。そう言った参加者の意見をふまえながら、今日も3校の報告をつないでより実りを深めて行きたいです。

高松鶴尾中学校の発表

板野中学校の発表

(香川県 Aさん)

感動しています。質問点2点お願いします。まず1点目、小中学校の連携がどういうふうになっているのか。2つめ、高校進学した後、他校で学んできた生徒達と板中で学んできた生徒達といかにつながっているのか、先ほど卒業生達が体育館に集まってきたとお聞きしたんですけど、その集まった後、各高校でその卒業生達がいかに頑張っているのかということをお聞きしたいと思います。なぜそれをお聞きしたかという自分の思いっていうのを伝えた方がよろしいでしょうか。後の討議の方に回したほうがいいでしょうか。

(司会者)

できたら後にしてください。

(佐賀県 Bさん)

教職員の側の課題として2点お尋ねしたいと思います。1点目は、学年内の全てのクラスで足並みを揃えてやって行こうという教職員のつながりを作って行かれた際の教職員同士の語り合いについて、具体的なその語りの中味を教えてください。2点目は、特定の学年団ではなくて全ての学年での取り組みに広がっていった、深まっていた高まっていこうとした際に、賛否両論ある中でと言う一言が加わっていたんですが、その賛否両論の中味を教えてください。

(福岡県 Cさん)

簡潔な質問という事なんです、少し自分の心の実状を話して、質問を1点だけさせてもらいたいと思います。

板野中学校では今の報告もありましたし、全体会での特別報告もありましたけど、部落差別を解決するための一つの切り込み口として全体学習という形を設けて子どもたちに部落問題の認識を深める、あるいは育む、そういった取り組みを子ども達同士で関わる中で作っているのはよく分かります。

福岡市では、1990年度同和教育の実態調査が行われました。1991年度にその結果が出た訳なんです、部落の子と部落外の子どもの学力格差の問題が大きくクローズアップされました。そのことで自分らは過去ほんとうに一生懸命頑張って、その結果として学力がついたらいいかという数字やデータを目の前にして今までどおりのやり方でほんとにいいのだろうかというところから、市全体として、学力差の取り組みという事で過去3年間必死に取り組んできたわけなんです。日常の授業改革という部分でほんとうに今まで通りの教科書一辺倒の授業で今までこういう結果だったんだからということで、過去に実践者が何人もおっただろうけど学校全体としては何も分かるわけだからこれに対してどうなのかというところで、考えてみれば、板野中の報告にあったように板野中学校のとりくみというのは学校全体でしょ、学年とか、特定の先生だけが一生懸命頑張ってAちゃんBちゃんを変えたという取り組みじゃないから、すごいと思ったんですよ。自分達も運動的にみてこの学力保障の取り組みがいいのか果たしてまちがっているのかまちがっていないのか、あるいは足りないところはどこなのかということを経年毎に授業公開研をしてから検証するわけです。総括していくんでよね、毎回。総括の部分で当然板野中学校も過去何年間かの取り組みをして、さらに2500円の冊子を昨日買って発表読ませていただきましたし、今日もその資料で報告されておりますよね。そういった部分での総括をどういう形でやっているのかなあということをまず聞きたいんですよ、一点、それだけなんですけど。実は自分の所、福岡市なんですけれど、同和教育の推進は福岡市同研だけじゃなくて、福岡市同研と福教組福岡支部、組合ですね、それと福岡市協議会の三者で同和教育の運動を作ってきた過去の歴史があります。三者教というんですが、この三者教の方で一定の方針とか教育要求なんかを対行政で交渉しながらいろんな教育要求を獲得して、そして獲得した以上は自分達は実践を差し出しますよね。その中で福岡市の仲間の同和教育の実践をさらに高めていこうとなっている関係で、学力保障の取り組みの総括も当然この三者教、行政、当然その研究教育者という形で大学の先生なんかも入れながらこれからの解放教育のありかたを助言していただくと、そういうメンバーで総括しているわけです。板野中はどういうメンバーでどんな総括の仕方をしているのかなあということをお聞きして、福岡市の方に持って帰りたいと思いますので、ぜひ教えていただきたいと思っています。

(三重県 Dさん)

今現在のムラむらの方々、あるいは子ども達の状況から本音で語り合って生き方比べをされていく様子たいへんよく分かりました。ただ子ども達がいつも最初に戸惑っていく、歴史の流れの中で歴史学習の中でムラの認識をどんなふうにしていくのかというあたりが、今一番の課題なんじゃないかなあと思っています。それでどんな形で歴史の流れを、あるいはむらのあり方を子ども達と一緒に協議されてきたのか認識されてきたのかをできたら教えていただきたいと思っています。

(福岡県 Eさん)

1点だけ質問させていただきたいと思います。意見は後ほど述べさせていただきたいと思いますが、すけれども、全体学習という形の板野中学校の取り組みの部分で、全体学習をこんなふうに取り組みました。あるいは子供達の声、あるいは親の声という形で、こんなふうな語りが出ました、と言った部分は非常によく分かるんですね。ところがもう一つぜひ教えていただきたいのは、日常の子供達が、結果として語ったことは分かるんですが、日常のその子供達の生活背景みたいな部分が実際にどういったものであるのか、そういうふうな語りにいたるまでの子供の経過と言いますか、子供と教師とのつながり、そんな部分がどういう葛藤があってそういう結果になっていったのかと言うその部分のいわゆる裏と言いますか、日常の部分でのですね一人一人の板中の先生方のまさに悩みもあるだろうし、そんな部分の子供に実際に関わって、あるいは家庭に足を踏み入れてどういった実践があってこういう結果になったと言う部分を、先ほど総括の話にも出しましたけれども、ぜひその前段の部分をですね、掘り下げて教えていただきたいと思います。

(奈良県 Fさん)

私一人前の方の質問と重なる部分があるんですがすけれども、3ページの特別報告のところには先ほども言われましたけど、当の部落の子自身が部落問題学習が終わることをひたすらうつむいて願っている、とにかくこの授業はようおわらんかな、それは奈良にもおんなじような状況がありました。その中から、何でうつむくんや、なんでに誇りが持てへんのや、水平者宣言の中に「我々がえたであることを誇りうる 때가来たのです。」で、その一文がどうして響かないんだろう。やっぱりそれは教え方に問題があるんじゃないかと言う事で、部落史観の転換ということが言われてかなり久しくなります。にもかかわらず、やっぱり全同研の報告通してみたら、やっぱり涙ながらという部分が圧倒的に多くて、確かに悲惨な事実は事実ですし、差別の実態もあります。そのことに学ばなければならないという全同研の課題もそれはそれで非常に正しい事だし、そういうふうにしていかなければならないことなんですけれども、学校の中で、その誇りを持たせる部分、どういうふうな展開をされているのか、もう少し詳しく、部落問題学習の中味が変わったという報告ありましたけれども、さらっと流れたように思うんです。その中味が変わっていった、変わっていった過程をもう少し詳しく知りたいなと思います。同じ部落民として子ども達ももっと顔を挙げて自分を受けられるようなそういう中味、どういうふうな展開をされているのか、非常に気にかかります。詳しく教えていただきたいと思います。

(徳島県 富加見)

質問を多くいただいてなにかから答えていいかわからんのですがすけれども、自分が答える事と、今日まで実践をしてきて、いろいろ悩み持っている先生、担任の先生が大勢いますので、分けて考えたいと思います。始めに、小中高の連携ということなんですけれども、私、板野町に赴任してきて、9年目になります。私が赴任する前から、板野町では板野町学校同和教育研究会という組織がありました。ここではどういうことをするかと言いますと、就学前から高校までの各校の同和教育主事の先生、同和教育担当の先生、それから学習会専任の先生、そのような先生達が毎月1回、地域の隣保館に集まり、そこでいろいろ子どもたちの情報交換をまずするわけです。子どもたちは学習会でどんなことしよるかな、小学校の先生はA子さんB子さん送りだしたけれども

中学校ではどうですか、また中学校の方は高校どうですか、そういうふうな情報交換がまず一つあります。それから授業の方では、中学校の教師は小学校ではどんな授業をしてくれようだろうか。その中味がわからん、それから高校の先生も中学校から子どもたちを上げてくれよるけれども、どんな学習をして高校へ送り出してくれようだろうか。それから小学校の先生にしてみれば、就学前でどんな教育をして小学校1年生に上がってきよるんかがわからん。じゃあお互いに実践を交換をし合って公開授業してその中で論議していく場をもとうでないか、そういうことで就学前は、年1回公開しています。小学校の方は、低学年部会、中学年部会、高学年部会に分かれまして、うちの校区には3小学校あるんですけど、それぞれの小学校の方で、公開授業をして、それから高校の方は高校と養護学校とがありますので、相談して今年度は高校がする、今年度は養護学校がするという形での公開授業をします。その時に就学前から高校の先生まで全てが、たとえば今年度、学同研で板野中学校が今度公開授業をしますよ、と言ったときに就学前から高校の先生までが、きてくれるわけです。うちの学校の公開授業は全体学習ですけれども、その時に全体学習をご覧になってまた意見をいただいて、それでお互いに立場の違う学校なんですけれども、そこで、教育内容を深めていく、そういうことをやっています。今こんなことができ始めて力強いと思うのは、ここ数年なんですけれども、小学校の先生方が板野中の全体学習にきていただける。この間も「ふるさと」という授業に取りくんなんですけど、その時に送り出してくれた1年生を担当した先生方がきて、「A君、B君、先生もがんばるとるけんいっしょにいかんかよ。」というようなことを言うてくれるんです。そういうようなことができだしたときにうちの全体学習の変わる1つのきっかけにもなったように思うんですね。それから今度、うちから高校の方に板野高校に多いときは6割くらいの子が入学します。その時にやっぱりさきほどの発表の中にもあったんですが、多く行く生徒達がややもすれば、「先生せこい、なんかいろんなことで発表できん、」というようなことを悩み持ってまた中学校の方へ帰ってくるような現実もあったわけです。でそういうふうな学同研の話し合いの中で、板野高校の先生が頑張ってるけん、ということで、高校ですからもなかなか時間もとれません。がそういう中でも、ロングホームでもやってくれるし、集会も開いてくれて、今板野中学校がやっているような、全校でといったら人数が多いので、学年事です、学年事の集会を開いてくれて、その時にも小学校中学校に案内してくれて、一緒にまたそこで私たちもうちの送り出した生徒達がどんなふうにもそこできんばって発言しよるかというような状況も分かるんです。こういった学同研の状況があるんですけれども、それでもさらに、わかりにくいことがあるんでないか。そういうところは地元の解放運動に関わっている人からアドバイスいただいて、たとえば、「おまえやほんまに連帯って言いよるけれども、町内の学校の連帯できよんかな。」っていうような提案等もいただいたり、板野中学校によく来てくれていろいろ教えてくれるんですね。「全体学習見よったら発言できる生徒とそうでない生徒がおるなあ、発言する生徒の思っているのはよう分かるんだけど、発言できない生徒、しようとしんない生徒、ま、いろんな事情があるにせよ、そういういっぱい生徒悩みもつとんと違うか、発言できる生徒だけの思いをつかんで、それが全体学習の全てだ、子どもたちがそれによって感じているんだっていうのは、ちょっとおかしいんでないか。」などのいろいろな意見をいただいています。そしてそれをみんなで考えて、ほんまに発言できない生徒の思いはどこで掴んでいくんな。もちろん担任の先生は体育館に入ってくる全体学習の前に、ほんまに自分の思いをぶつけて子どもたちもぶつけて共に高まって全体学習にのぞんできますから、学級の方で、そこまでのことを一生懸命やってくれとんです。ところが、やっぱり体育館の中に入ったときに、大勢550名近くおるから発言せん生徒の思いがわからん。じゃあ、その思いを常の思いを掴んでいくためにどうしたらええんかというふうな話になってそれだったら、板野町で学校の方で全部でいっぺん意

識調査をしてみたらどうだろうか、今まで各校で学校の単独でいろいろ取り組んではおりましたけれども、やっぱり総合的に、小学校の4、5、6年、中学校の1、2、3年それから高校の1、2、3年、その用紙も話し合って、その質問事項も同じようなものを作って、それぞれで取り組んでみよう、質問もほとんど同じです。ただ小学校の生徒については、部落問題の起源とかそういう難しい言葉で聞いても4年生5年生充分理解できません。だからそのことは、かえていくんですけれども、そういうふうな意識調査をやっていこうと去年話し合いができて、資料作成についてもいろいろ手間かかりました。今年度の5月にそれぞれの学校で調査し、それを持ち寄って、今その考察に入っておるんです。その考察についてはまだ出来上がっておりませんので、今申し上げる事はできないんですが、そういうふうな事で目下とりかかっております。課題が、小学校の課題が、中学校の課題が何かという事を掴んで板野町の全体としてやっていこうという取り組みになっております。

(司会者)

できるだけ質問の意図に答えられるような発言をお願いします。

(徳島県 吉成)

いろいろご質問があった中で私の担任としてできる範囲内でいろいろな体験を交えながらお話ししたいと思います。実は、昨日、本校の森口が特別報告の中で発表していたんですけれども、私、「峠を越えて」の販売でカウンターにいました。講演が終わると同時に多数の参会者が本を購入にきていただきました。非常に忙しい中、山ばかりが、人ばかりが山のようにできている中、ある人が買いにきていただきました。「5冊ください。」って言いました。ありがたいなあ、この本がほんまに広がっていくんやなあって思いまして、深々とおじぎをして「ありがとうございます。」って言ってふと顔を挙げましたら、自分の母親でした。この学習を教える中でどうしても乗り越えられない大きな壁が私自身の中にありました。それは私の親に、自分の親に、いかにこの学習この教育を話をしていくか、いかにこの問題の重要性というものを解いていくか、そういうのが私にとって大きな壁でありました。初めのころは喧嘩になって話になりません。全く今のうちのクラスの生徒と同じです。きちっと話していく事ができませんでした。ですから、怒りでそこから話が続きませんでした。3年になってようやく落ち着いて話ができるようになるんですけど、どこまで分かってくれたかわかりません。親にしても、いろんなメンツとかがあって俺に話をしてくん部分があるんと思うんですけれども、そういう昨日のような状況を見たときにほんとにうれしかったです。我々は教師である以前に一人の人間なんだったという事そのことを忘れとったらいかに話をしても、教師ぶっても、仕方がない事やと思います。我々がしてきた同和教育そういうものは学校の塀の中だけの、学校という枠の中だけの取り組みであるっていうことに気づいた瞬間がありました。それでは、教師がそれでは、生徒は家で話ができてへんそんなふうな思いがしました。ほんとにみんなが学校の枠を離れたところでこの問題が結びついて語っている話ができるそんな取り組みをしていかねばと思います。

ある時授業に行ったら、ある子が、授業の最中に、美術の時間でしたけれども、教室の中に飛び込んできた蜂を危ないからといって、ふざけ半分にはたこうとする姿が見られました。激怒しました。何に激怒したか、蜂のもつ、命という一つの、小さな小さな命ですけれども、そのことに激怒しました。それがもし自分の立場であれば訳も分からず入ってきた教室で、外に出たい出たいと言ひよる蜂が、目に見えんガラスに向かってぶちあたっておる姿、それを後ろ手にはたこうとする、もし自分が蜂であつたら絶対そんな事できへん、すごく激怒しました。やって

いた本人含めみんなで話をしました。ほんとに同和教育っていうのは、一つ一つの命や考えや思いを大切にしていける学習だと思います。そういう事が部落問題学習の時間だけじゃなくてあらゆる日常生活の場面で部落問題学習を中心に据えて話し合っていかなければ意味がなくなってくるんじゃないかと思います。実践に結びついていくような部落問題学習そういったものをこれからより一層やっていかなければと思います。

私、話をしだしたら長くなりますので、このたびはこのくらいで終わっておきます。
またのちほど。

(徳島県 仁木)

全体報告をした森口先生と一緒に5年前から全体学習に取り組んできたんですけれども、先程質問がありましたそのいくつかを実際に授業をしてきた者として、お答をしていきたいと思います。

まず今の全体学習の一番の弱点と言いますか、えらいところは何かと申しますと、先ほど奈良県の方からご質問があったのですが、全体学習は我々が仲間と共にいかに生きていくかという事を子供達に問いかけそして共に学んで行く、共に歩いていくそういうふうな面が強うございます。従って全体学習の中でたとえば歴史的なものを取り上げるというか、いわゆる歴史教育とかそういったものは全体学習の中で取り上げて行くのは非常に難しい点がございます。そういった事で我々といったしましては、子供達が実際に外に出た場合にぐらぐらなるときに、そういった拠り所になりますのが理論的と言いますか、そういった面の学習なんですけれども、そういった点でやや弱い点があつて、それは各クラスにまかせられているという事があります。その点をこれからどのようにカバーしていくか、たとえば、渋染め一揆にしてみても、渋染め一揆の取り上げ方が1年と3年では違うだろうと思います。そこらあたりの全体学習のカリキュラムと言いますか、そういったものをこれから考えていかないかだろうと。それから、学年内のことも先ほど言いましたけれども、学年内も全体学習をする事によって、たとえば全学級の生徒の足並みを揃える事ができます。それから、我々教師の方も足並みを揃える事ができます。それはたとえば2年生から3年生に学年が上がったときに、いわば我々の意識としても自分のクラスだけじゃなくて全部の生徒が自分のクラスの生徒であると同じように話していけます。廊下でおうてもどのクラスの生徒とも同じように部落問題を話していく事ができます。そういうふうな状況がずっとできていきました。組み替えによって部落問題についての中味のいわば一番低かったクラスに合わせるというんじゃないくて、どのクラスも同じようにやっていくことができます。そのような非常に大きなメリットがあったように思います。

それから賛否両論の問題ですかねえ、このことについてですが、資料報告集の終わりの方に全体学習の足跡という中にも出ておるんですけども、たとえば何でこんな大勢の中で、子供を舞台上で躍らすというようなそんな形でこんな授業をしていかなあかんのか、多感な13、14の時に、何でこんな事をしていかなあかんのかというような質問が実際に授業者の中から出てきたわけです。でこれに対して我々がどういふふうに答えていくかということだったんですが、実際には、この質問に対して我々教師は仲間は答える事ができなんだわけです。ところがその質問を出した先生のクラスのある生徒が、「先生学習会の通知を何でそこそ渡すん、先生いいよる事としよる事が違うでないか。」、あるいは、ある生徒が、「先生私の町は丸岡さんの詩に出てくるところと名前がよくにとる、私の家は部落なんですか。」あるいは「私が部落外の人と結婚したら私は部落でなくなるんですか。」そういった質問をどんどんぶつけてくるわけです。でそれによってその先生も、我々と一緒に、とにかくええかつこした授業はいらんのや、そういうふうな形で

全体学習を見ていくようになる。賛否両論それ以外にもまだいろいろあるんですけども、そういった中で我々自身がその賛否の否の方の意見を真正面から受けとめて、それで子供と生徒と一緒に乗り越えようとして初めて充実したものができていくんじゃないかなと考えます。とりあえず終わります。

(徳島県 山口)

失礼します。私は板野中学校へ来て3年目になります。質問の中で学年内の全ての教師がやるという時の語り合いについてお話させていただけたらと思います。私が板野に来たときにはもう全体学習が始まっていまして、担任をするとこういう全体学習を進めていかなあかんのやなって見ていました。1年目は副担任でしたので、傍観者のようでした。「峠を越えて」の中でも書かせていただきましたが、担任になれば全体学習をしなければならない、させられるという意識でいたんですが、その次の年つまり2年目になるんですが、3年生の担任をする事になりまして、全体学習しなければならないという意識から、部落問題学習に打ち込むことができる自分になりました。どうしてかという、そのきっかけはいろいろありましたが、森口先生に手渡された「よろこび」という本でした。「峠を越えて」の中でも触れましたが、その本を読んで私は自分の父の事が思い浮かんできました。自分の父に対する気持ちの中に、部落問題に関わっている、つながっている、そういうものがあることが少しずつ見えて来ました。部落問題が自分の問題であるという事を認識して、それから自分の心の中の問題として取り組めるようになりました。全体学習をしていく中で、自分の事を語っていく、そういう中で子供達がまた意見を私に返してくれる、また子どもたちが変わっていく姿を見る事によって、自分からやらなければならない問題なんだっていう事が、分かってきたんです。決して生徒のためにやってやるとか、そういう考えじゃなくて、これは自分の問題なんだっていうことが見えてくる。担任の教師が、全体学習に取り組む中で、そういうものが生まれる。決して、話し合いだけによってどうしようこうしようと教師だけが集まって話してできているわけではないんです。

それからもう一つ、高校進学後の他校の生徒との板野中卒業生とのつながりについてのご質問があったんですが、私が去年送りだした生徒についてお話させていただきます。その子は、たった一人でその高校に行きまして、部活を頑張るという形でその高校を目指して行ったんですが、自分が部落出身である事がなかなか語れなかった、周りが全然どういう生徒であるかが分からない中で部落出身である事が語れなかったという事を聞きました。どういう事を今その彼がやっているかと言うと、部活で親しくなった仲間に自分が部落出身である事を打ち明けることがやっとなされた。そこから、自分のまず身近にいた友達から話をしていく、クラスではまだ話ができていないんですけども、担任の先生にも僕は部落問題について頑張っていきたいと話したそうです。それから高校を解体した部落問題について語る会で、高校友の会というものがあるんですが、そこで他校の生徒とつながりを持って、いろんな仲間と連帯して自分の高校で実践を深めています。

それから日常生活の中でのご質問がありましたが、担任としましては毎日部落問題をぬきにしては語れません。ほんとに毎日毎日子供達と、どういうふうに部落問題と関わって行くかを常に考えます。毎日子供たちが生活ノートを出してきます。その生活ノートに一生懸命自分の思いを重ねていきます。そういう中で子供達と全員とは毎日話ができませんが、生活ノートで語り合う事を通して、生活を見つめて行こうとしています。今私は1年生の担任なんですが、入学当時よりもずいぶん子供達も成長してきているのが感じられます。子ども達同士でも、休み時間とか、部活の時なんかにも部落問題について話をしている姿が生活ノートの中から出ていますし、家に

帰っても、親とこういう話したとかそういう事が書かれています。子供達自身の生活の中でも部落問題が核になって来つつある事を私たちも実感しています。

私自身がこの問題に取り組んで、すごくよかったな、板中にきてほんとによかったな、いろんなものが見えてきてほんとによかったなと思います。昨日もアスティ徳島の会場からの帰りのバスの中で、同僚とこの部落問題について話をしておりましたところ、前に座られていた方が「徳島県の方ですか。って、私たちの方を振り返られて、いろいろお話をされ、「私たちは長崎からきました、長崎ではこういう実態があります、こういう取り組みをしている。」、そういう話がバスの中でできるお互いすごくあったかいものを感じとれる、この学習をしてほんとに人の心ってあったかいなあって実感している毎日です。子供達の言葉、生活の様子、ずいぶん私自身あったかいものを感じられる、部落問題をやっていく事はずいぶんと人間のあったかさを感じとれるんだなっていう事を毎日実感しています。つたないですが、これで終わらせていただきます。

(徳島県 豊田)

今年で4年目になります。

さっき賛否両論あるっていうことを仁木教頭の方から言われましたが、私は2年間全体学習が大嫌いでした。どうして嫌いだったかと言いますと、13や14や15の子が大勢の前で私は部落出身です、つらい思いをします、と語るのを聞きながら、私はいつも涙していました。どうして自分がかわれたかっていうたら、去年度からです。森口先生と同じ学年になりまして、全体学習で私のクラスの生徒が、豊田先生から学習会の通知もらうがすごくうれいんですってみんなの前で言いました。私はそれまで学習会の通知を生徒にどういふうに渡そうかなってずっと考えていました。子供が学習会の通知をもらったら、自分が部落出身だという事が分かる。しかし、その子は先生からもらうのがすごくうれいんですって答えてくれました。その時から私は変わりました。それから今年また、森口先生と同じ学年になりまして、今年もやらなきゃならないなあ、と思った時に、家庭訪問にいつて保護者が、私よりちょっと年が若いんですけども、私に頭を下げて、「先生、部落問題学習しっかり頑張ってください。ぜったいこの子には部落ということをはずかしいと思わせないです。胸張って堂々と生きる娘にしたいんです。」って私に言われたときに、やっぱりがんばらねばと思って、2年前の私が、4年前の私が、全然したくないって言った私が、どんどん変わってきました。それは自分の問題として捉えることができたからだと思います。それと生徒によっていっぱいいっぱい変わりました。生徒も日頃の生活の中で、先ほども出ましたけど、今日はAちゃんと1時間ほど同和問題学習について話をした。でその内容を生活ノート大学ノートに2ページぐらいつづってきます。それに答えていくのが毎日毎日非常に時間を労するんですけども、それに答えてやることによってまた次の日も部落問題学習について書いて来るんです。1カ月ほど前1年の全体学習で「ふるさと」の授業、私がしました。その後生徒がまた書いて来ました。「もう1回しましょう。体育館でもう1回させてください、私のクラスはもうないんですか。」「もうないから来年また頑張ろうな。」って言うたら「もう1回したい。」と言いました。2日前吉成先生が2回「ふるさと」をやられたんですけど、「先生僕たちがしたかった、私たちがあの場に立ちたかった。したかった」って生徒が書いてきました。全体学習のために私たちは何時間も何時間も費やして、生徒と一緒に勉強していくんですけども、全体学習が終わってもその学習はずっと続けて行かなければならないと思いました。教師の間で放課後もよく話をするんですが、話の内容と言え、同和問題学習の話になるので、あの先生はこんなふうに語ってくれる、わたしにとってプラスになるんだな、ということがたびたびあります。教師集団が仲間っていうふうに感じてきたのが、去年度からです。今年もいい仲間

に出会えて私は一生懸命頑張っています。

(徳島県 近藤)

短くまとめたいと思います。板野中学校で報告者の富加見先生や司会者の阿部先生のもと、かわいがってもらっております。学習会の専任指導員をしております。質問にも絡めて言いたいんですが、私は2年前、同じ町内の南小学校で同じ学習会専任指導員をしておりました。その時一度、町内の同和教育研究大会で、初めて全体学習を見せてもらったんです。それ一回きり見ただけで、一種のショーをみたように思えました。クライマックスに近づくにつれてある子が泣きながら語っているところを見てショーとして第三者的に見ていたから、私はどちらかと言うと全体学習に対して反対意見を持っていました。今年母校である板野中学校に来ることができて、みんなと関わっていく中で全体学習のもてる意義を初めて実感できた気がするんです。だから今はすごく好きなんです。先ほどある方が質問されていたんですが、部落問題学習の中で涙ながらに語っているという状況もあります。でも涙にもいろいろあると思うんです。つらくてつらくてしかたがない涙もあれば、自分の正直な気持ちを言えることがうれしくて喜びで泣けてくる涙もあります。私も自身の涙の意味も変わってきたと思うんです。今までずっと誰にも言えないようなことを隠して、鎧を重ねてきた。全体学習の中でいっぱいいっぱい言う事で、その鎧が1枚1枚はがれるような、だんだん自分が軽くなるような、そんな感じがしています。板野についている悪いイメージを持っていらっしゃる方も多いかもかもしれませんが、中に入ってみないと分からない部分があると思うんです。中にはいらないで勝手によそでいろいろ言われるのはごつつい腹がたつんです。「峠を越えて」を今日も販売しているんですが、一見見た目は仰々しい本ですが、開けてみると、子どもの素直な正直な言葉で全然読みにくくないものです。だから一度開けてみてください。買ってくださいとは言いません。最後に一言、板野はいいところです。一度おいでてください。全体学習にも足を運んでください。よろしくお願いします。

午後の部

(大阪 山下先生の発表)

(地域教材について大阪・住吉の実態の報告)

(奈良県 Fさん)

むし返すようですけれども、昨日からちゃんとした答をいただいていないように私自身は思っております。たとえば、学力の問題です、京都の報告ですけれども。識字運動とか、いろんな運動がきちんとした運動がなされてきている一方で、低学力の問題について、ムラの親の中には、学力なんかべつにいらん。手に職さえあつたらんとか生きて行けるねん、て言う言い方もあります。それは、教師への不信任、あるいは学校そのものに対する不信任、そういったものが言わせる言葉であって、今現在ではそんなこと言うたって通用しません。やっぱり部落産業が危機的な状況の中にあつて、さっき大阪の西成の人が靴の問題言われてましたけど、私たちも、私自身が住んでいる橿原市大久保の中では手縫いの紳士靴なんてものはほとんど壊滅状態の状況にあります。そういった部落産業の危機的な状況の中で、手に職さえあればええねん、学力なんてかまへんねんという考えがもうほとんど通用しない。そういう思いがどっかにありながら、やっぱり、ええねんという開き直りみたいなもんが、言葉として口を出て来るんです。そういったことが、

低学力低学力ってとにかく学力付けないあかんねん、基礎学力付けないあかんねん、京都の人はそう言いますけれど、そういう親の思いをどういうふうに受けとめてもらえるのかなあって思います。さっきの方も言われましたけども、午前中ほとんど立つところもないほど、いっぱいいてはったのに、お昼になったらこんだけ、ここまで減るもんかと思いますね。それと、昨日も、朝私たち駐車場に車を入れて、そこから全体会場の受付に行くのにずーっと歩いて行ったら、すでに受付を終えて、全同教大会という袋を持ってどこぞに行かれる方がそろそろそろそろと歩いてはりました。どこいかはりますのん。全体集会の方向と全然逆ですやん。どこいかはりますのみなさん。あの資料を持って堂々と歩いて、何にも感じないんですかね。この分科会場ぬけていかはった人はね、真っ昼間からどこへいかはりますのん。こういう実態の中で、どんなに社会認識を子どもの中にどうやって育てていくんかっていうその分科会の目標を掲げられても、うーんっていうのが、私たち親から見たら、ええんやろかそれで、っていうものしか残りません。相も変わらず、質問してもそれに沿ったお答を一向にいただけないというのもなくその質問するのが実に虚しい気持ちになってしまう。だけども言わずにおれない。そういう私たち親の思いを分かっていただけたらんと、非常に愚痴ばくなりますけれどもちよつと愚痴を言わせていただきたいなと思います。午前中の中にも、あえて質問という形にしたんじゃないんですけれども、来年の報告に期待しないんですけれども、この報告の中にやっぱり部落外の子どもと部落の子どもと同じように全体学習していく中で、有象無象、子どもたち自身の中にも、あるいは学校の先生たちの中にも教師集団の中にも、いろんな思いあったらうと思います。口について出てくる言葉の中に私達からみて差別発言と思われる言葉もあったかもしれない。そういったことが、一向にこのに報告の中には見ることができないんですけれどもそういった有象無象の子どもたちのそういう思い、あるいは言葉をつづつひらっていく中でどういうふうに子どもが変わり先生達が変わってきたんか、そのどろどろしたものを根底にあるどろどろしたものを出示していただきたいと思います。昨日どなたの報告だったか忘れましたが、あのう、「ちゃんとしたものを報告したい。できへんかった一やいうて報告した一ない。」って言われた方いらっしやいます。そんなんだったら私はここで報告出す意義がないと思います。私たちも全県集会とか各県でやられている研究集会の報告なんかでもやっぱりおんなじですけれども、こういう取り組みした、こんなことしたっていう結果だけの報告するんじゃないくて、こういうことやろうとしたけれども、今のことがあって、ま、その今のこと報告するんだけれども、できなかった、あるいはやろうとしているんだけれども、もっと他にいろんな方法があるんやろか、他の地域の人たちどんな方法しているんやろか、こういう方法もある、ああいう方法もある、っていうことを教えてほしい。そういった意味を含めて報告を出して、その答が返ってくる、それを持ち帰ってもう一度実践する。そういうものがこの大会の義務じゃないかと思います。完成されたような、あるいはちゃんとできたことしか報告せーへんようなそういう報告だったらほとんど必要ないんじゃないか、いうふうにも思います。そういうことも含めて参加されるみなさん、やっぱり学校の先生なんだから、っていう言い方もおかしいんけれど、やっぱりあえて言わせてもらったら、誤解をおそれずに言わせてもらったら、学校の先生なんだから、私達は子どもを預けているんだから、その思いに、ムラの親の思いに答えてもらえるような報告と、分科会に参加する態度を求めたいというふうに思います。

(徳島商業高校生)

私たちは徳島商業高校の同和教育推進委員会の者です。私たちは午前中先生達が全国から集まって話し合いがあると聞いたので、私たちはぜひ聞きたいっていう気持ちで、午前中やってきました。けれども勝手にはいるのはいけないと思ったので、とりあえず受付の方に行きました。す

ると、お金を払うように言われました。けれどもお金を払わないとこの話に参加できないということを知らなかったのです。とりあえず、体育館の外から聞くぐらいはいいだろうと思って体育館の外からこの話を聞いていました。そしたら、その受付の人はお金を払っていない人は帰るようには言わなかったけれども、そういうふうな態度で私たちに接してきたので、私たちは帰らなければいけないようになってしまっていて私たちは学校に戻りました。私たちは聞きたいという気持ちで、ここへ来たのにお金を払っていないという理由で帰らされました。外から聞いているときに、この体育館はいっぱいでしたけれども、中には寝ている人もいっぱいいました。私たちが聞きたいという気持ちで外から聞いているのに寝ている人がいっぱいいて、すごく矛盾を感じました。それで私たちは学校へ帰ってもやっぱり聞きたかったので、私たち同士で話し合って再びこの体育館へ戻ってきました。それで知っている先生方に相談して入れてもらいました。とても純粋な、先生方の話を聞きたいという純粋な気持ちを簡単に傷つけられました。

この学習はやっぱり生徒がおらんかったら、この学習はないと思うし、生徒がおるけんここに先生がおると思うんです。それで先生がいいと思ってやっている高校のロングをちょっと言ってみたら、先生がいいと思ってやっても、生徒の私達にしてみたらよけいなんか中途半端で、こんななんなんの意味があるんだろうって思うようなものもあります。先生も頑張っているっていうのは分かっているけど、私らに教えよう教えようっていう気持ちが先にたって、先生っていう形の中に捕らわれ過ぎっていうか、分かってないような先生もおるのに、その先生に教えてもらう私らにしてみたら、よけいせこうなって、先生も分からなあかんと思うけど、私らも頑張ろうっていう気になっている子もようけおるし、そういう子の気持ちも大切にしてもらいたいと思いました。原則としてお金はらわなあかんっていうのもわかるとるんやけど、外におるぐらい、この場におるぐらい許してもらってもよかったんじゃないかなあと思いました。

私らは本間に自分の問題として捉えて、やっていきたい、自己解放していきたくってこの場に來たんですけど、最初の午前の会と比べて人数がごっつい減つとると聞いて、やっぱりこの会に参加しとる人っていうか、その帰った人は自分の問題として捉えてなくて形だけしかたなくって考えている人いっぱいおると思うんです。そういう上辺だけでやるっていうんは、ごっついくやしかって、私やも踏みにじられて、どう考えとんだらうって思いました。

私も同じようなこと繰り返すようなことになるかも知れないですけども、やっぱり先生方、先生っていう形に捕らわれすぎて、教えよう教えよう、生徒に教えないかんけん同和問題を勉強しよう、ほういうふうに思っている先生がこの中にはおると思います。実際に私が中学校の時に受けてきた中には同和の時間とかは、上辺だけのものでした。ただ単にプリントを配られて国語の教科書みたいにそのプリントの説明をして読んで感想を書いて終わり。そんな同和の時間が多かったです。よかったら先生の話も聞かせてください。

(司会者)

今の生徒の生の意見につないでくれる方、

(司会者)

一旦ここでトイレ休憩したいと思います。次2:45から始めたいと思います。総括討論になります。この中で今のことについて、その前に司会のほうから、ちょっと提起させていただきます。

(徳島商業高校生)

ちょっと待ってください。私達一生懸命言っただのにどうしてこの時間帯に休憩入れるんですか。

(司会者)

ちょっと運営の関係があるから、きちっと話をするから、10分間休憩させて。

(参会者)

こたえてやりよ。

応えてあげなさいよ。

応えてあげたほうがいいんとちがいますか。

(徳島県 吉成)

すみません、一言言わせてください。学力の話、出ましたけれども、本当の学力保障であるとか本当の進路保障っていうものがどういったものであるのか、後ろにおけるあの子や見よったら、その答になっていくんでないかなと思います。私自身中学校から高校にやるときに、やるっていう言い方おかしいんですけども、中学校卒業するときに本当に学力のみを保障することが学力保障進路保障のように思っていました。

しかしながらこの学習をしていく中で、様々なものが見えてくる中で、本当の進路保障とは何なのか、本当の自覚を持って卒業していくことはどういうことなのか、本当の自覚を持って高校や専門学校や社会に出ていくってことは、その子の人生にとってどういう意味を持つのかということ、そのことを本当に徹底的に、中学校にいる間に力づけさせてやりたい。そして中学校卒業しても、自覚を持った中で一人間として、一生懸命生きていくようなそんな人間をつくらねばならないんじゃないんだろうか。そんなふうに考えが変わってきました。お手元にある緑の板野中学校の資料の中にあるかと思いますが、「峠を越えて」の中にあるかと思いますが、卒業生の答辞、これを読んだ者が後ろにあります。本年の3月31日に徳島新聞に載りました原稿を書いた者もおります。その者らも含めて本当に高校で一生懸命自らを解放し、また、本当の人間の在りようとはどういうことなのかをみんなにより多くの者に訴えておる姿、そういうものをより多くの人に知ってほしいと思います。以上です。

(司会者)

休憩ちょっと入れます。高校生たちが訴えています。少なくとも、休憩の間にへらんようにしてください、人数がですね。できたら今からの提案に沿ってですね、高校生や親に話を返してほしいと思うんですが、今の話を聞きながら、家庭訪問というのは親に怒られに行くもんだっていう先輩の有名な話を思い出しましたがけれども、ムラの子とか親と部落問題を語る、それはどういう意味なのか、私達一人一人にとって。午前中の中にありましたけれども、寝た子を起こすなとはどういう意味なのか、私の目は決して寝ていないのか、寝ているのは誰なのか。それから親が子を起こす、簡単に割り切っていいのか、私達教師が起こしちゃいけないのか。そういったところをぜひ論議してほしいと思います。そういったことを考えたときにですね、親の愛とか期待とかそういったものを一緒に考えていけるんじゃないかと僕は思います。子どもたちが自分達の社会的立場を自覚していくときに、我々教師はどのような位置に立つのか。そのこともできたら出してください。それから午前中のお父さんお母さんの話にもありました。たとえば、集会を何でこんな大事な時期にしたんですか。発言がありましたね、親の。親と共に子どもを見つめていたのかな。そしたらこの発言は親から出なかったんじゃないかな。と私は思ったんですよ。生徒さんも含めて、それは1つの柱です。もう一つの柱はですね、教育内容どうやればよいか、そこ

出してください。なぜそれについての教材をするの。奈良から出されています、誇りを持たせる教育についてはどう在るべきか、そういったことについても実態があると思いますので、是非だしてほしいんです。もっと丁寧に出してほしいです。子どもだけ頑張らせていないか、そういう自分達をチェックする意味でそういう視点で発言してみてください。

それからみんなそうだと思いますが、一人の子どものこと話したら、1時間でも2時間でも3時間でも語れる人達ばかりです。分かります。できるだけ沢山の人の人に保障するというということのできるだけ話をまとめて出してください。

休憩後

(Gさん)

先ほどの生徒達の参加の件ですけれども、子ども義務教育などもやっと保障されまして、参加権あるいはげんこう年齢(?)というのは、我々学校の中でも知らせていかなければいけない立場でもありますし、それは実際提起していく場でもあると思います。先ほど司会者の先生からも言われましたけれども、やはり分科会運営責任者からの意見をお聞きしたいと思います。

また、参加費そのものを生徒のほうからに負担させるっていうのはやはりちょっと行き過ぎではないかと思います。いくらかの経済的にもある程度配慮する参加の仕方ってものを考えるべきでないかな、先生方も通して参加し得るような体制ってのが、その場でも臨機応変にとれるような体制で、この会を運営して行きたいものだな、ということを述べさせてもらいます。出てしまった者は出てしまったのはしょうがないといえましょうがないと現実こういった中で我々運動進めているわけで、ここに残っている人ってのは、そういうところ、忙しい、あるいはそれぞれの事情があって参加していない、しかし自分は最後まで頑張って広めて行くんだってことで動いていると思いますんで、出て行かれた方、帰られた方のこといくら言ってもしょうがないんだから、ということです。

(奈良県 Hさん)

私が今から言う意見は先生方の代表じゃなくて一個人の考えだと聞いてください。今おっしゃられたように帰られた件については先ほど父兄の方と司会者が言ったように、保護者の方と司会の先生が言ったように、今日日曜日でしょう、明日月曜日からは授業があるわけです。やっぱり授業をしなくちゃならない先生はもう帰られました。それから、Fさんにもお答えすることになると思うんですけれども、同じ県なので先程からちょっと一言言いたいなと思ってたんです。他の授業の他にも、例えば私は奈良からきていますからみんなと一緒に来たからお土産を買う時間がないんですね。バスですぐ帰るんです。それで明日閉会式が行われるんですけれども、さて閉会式に出たほうがいいか、私には1年生6人が待ってくれているんですよ、お土産待って。お土産にぜひ徳島の特産物を持って帰りたいと思っています。そしたらそのお土産探すのに私すごく時間がかかるんですよ。男の子には何が喜ぶだろうか、女の子には何がいいだろうか。閉会式に出なくてお土産買っていいのか。やっぱり子供たちに約束してお土産買わないのは私自身嫌だから、少し閉会式に遅れてお土産買おうか悩んでいるところです。それは答になっていないんだけど、ある人が見た現実を今の取り方だったら、一面的なのね、イメージしている先生が、帰られた先生は怠けているみたいにとっちゃったと思うんです。だけどそこには人のいろいろな思いがあるから、午前中私はしっかり勉強したから、午後からはやはり徳島市を見学したい、遊んでいるふうに見られるかも知れないですが、私はその先生がそれでもいいとおっしゃるならそれ

でいいと思っています。もう一つ話がしたかったのは、例えば私が土曜日も仕事をするために夕方まで残っています。日曜日も学校に行って仕事することが月に1、2回あります。でも4時過ぎに帰ることもあるんですよ、私には子どもがいるんで、そしたら町民の人がね、たった1、2回4時に帰るところを見てね、「先生早く帰るからなまけているな。」っていうふうに言う人が居るんです。私が日曜日学校に行って仕事をしているのを本当にみているのかなって思うんですよ。だけどそれは人のエゴだと思うんです。ただみなさんが見たのは、ある意味では村民のような目でみたと思うんです。だからある事象を一つの捉え方じゃなくて、いやこういうふうにして考えているかもしれないとか、いろんな見方で考えてほしいんです。私は、37才になってまだみなさんと同じように、なかなかできないんですよ、みなさんは純粋で、17才ぐらいの年頃だから、今のような取り方をなさってね、それでいいと私は思います。

それから、住友さんに賛同しているんだすけれども、発表を朝からいろんな聞いて、とても感銘受けて、明日からの元気を発表者の先生からいただきました。いい情報ばかり、主に80パーセントぐらいいい方におっしゃっていただいたんで、私も、そういう発表形態じゃなくて、こんなふうな実践をしました、こんないい面がありました、ただしこういうような弊害っていうか、うまくできないところあって、こんなふうになりますよ。先生方こういう原因があるから。ここんとこ知っててくださいみたいな、ちょうど半分ずつの報告だったらまたいいかなと思いました。

(熊本県 Iさん)

まず彼女たちに返したいと思います。例えば、内のムラの人達がこういう大会に参加したい、で、金がない。じゃああんたたち金がないから入るな、そんなことというような全同教だったのかな、そんなこと言うような全同教だったのかな、そういう組織に僕たちは結集しているのかな、今私達は教職員ですから、金が払える立場にあるから払っているわけでしょう。でも子どもたちになにそれを要求する必要はないと思うんですよ。確かに会場運営上ですね、大人たちの感覚で払わせようはらわせなあかんかなっていう考え方も出るかもしれないけど、でもこの大会で自ら今日日曜日、自ら進んできた子どもたちを、外寒い、外でもせめて聞かせてください、っていう子どもにそういう発言はやっぱりしちゃいけない。そういうふうに思います。

それから私の仲間が2人帰ったんですよ。なぜ帰ったかと言うと、熊本県っていう所からきています。担任持っています。来るときにかかるんですよ、お金がね、学校の中で、管理職と2時間けんかして僕の仲間がやっと来れた、ただし条件をつけられた訳です、月曜日の授業には出る。だから精一杯頑張って今日の昼までしかおれなかったわけです。で、今日の板野中学校をぜひ聞きたい、全体学習ぜひ聞きたい、そういうふうにおもったんだけど、ここまでしか居れない、帰って行った仲間がいるっていうこと分かってください。確かにどこかで遊んでいるそういう奴もいるかも知れませんが。しかしあなた達の周りにはそういう思いで来てくれる仲間もいることは分かってほしいなあと思います。

それから、板野中学校それから高松の鶴尾で、たいへんすばらしい発表だなと思うし、全体学習の中で、子どもたちが解決に向いて行く、元気が出て、来てよかったなと思うんですが、あえて言わせてもらいたいことがあります。それは今年熊本県の小学校で、研究発表があったんですよ。その中で、全体学習と似ているかなあと思うんですが、4年生3クラスの子どもたちが体育館の中に集まって500人を越える参観者の中で、うちの解放子ども会の子どもたちが、出身明言をしていくわけです。その中で自分の親が受けた差別、自分達が受けた差別、自分達がどういう思いで学習会をやっているかということの6人の子どもが一人一人言っていく訳です。僕た

ちはあすごいなあ子どもたちはと感動したんだけど、隣にいた同じムラのかあちゃんが、「何でもまたうちの子どもたちにこういうことを言わせるの。」って言ったんですよ。「分かっているよ、私達がつながっていかなあかんし、私達が伝えなあかん、それは分かっているよ。でも何でうちの子どもたちがいわなあかんの。本当は部落外の子どもの問題でしょ。部落差別をなくすのは部落外のほうでしょ。」そういう発言を聞いたときに、ムラの、私の親たちの思いが、もう分かってらっしゃると思うんですが、あえてそこんと言いたいなと思って立ち上がって言わせてもらいました。

それからうちの仲間作りを一つきいてもらいたいですが、私今熊本県の推進教にいます、同推教に出る前に担任した子どもが、仲間づくりを自分でして行くわけです。その子が母親が突然居なくなって、2カ月間行方が分からなくなって、非常に精神的に落ち着かなくなって、ところがこれを誰にも言わずに2カ月間学校に来た訳です。その子が友達のいじめを見たときに、いじめをやめようって、学級で話し合いしようって言ったんですね、彼がかつてどちらかと言うといじめる側にいたものだから、いじめをしていた子が何を言うんだ、って言われたんです。彼は返す言葉がなかったんだけれども、隣にいた、いつも全然しゃべらない女の子がその子が立ち上がって、「じゃあ、みんな明日からいじめはせんとね。」って返したんですね。なぜその子がその時に立ち上がって言ったのか、実は半年前にそのもとやすが、もとやすと言うその男の子が、男の子がかあさんがいなくなったことをその彼女に伝えているんです。実はその彼女もお父さんとお母さんが離婚してお母さんがもう家にいない。その思いを二人でいつのまにか日記を通じて、共有していたんですね。彼らはそこから発展して、学級の中単身の家庭の仲間やいろいろなを持っている仲間と表面上には話されないとこで共感という形でつながって行って最終的には、学級の中で話し合って自分の心を出して行きました。そういう仲間作りをやっている子どもたちに励まされながら、今自分は頑張っています。以上です。

(参会者)

高校生たちに席を確保して挙げたらどうですか。

(司会者)

高校生の人達、前に席が空いてますので、座って参加しませんか。

(三重県 Jさん)

三重県の松阪から来ています。今の高校生の発言を聞いていまして、松阪の高校生友の会の高校生のことを思い出しながら聞いていました。実は先日も松阪市内で教職員、PTAそれから市の教育に関係する人が集まって同和教育を考える集いが開かれたんですが、その時同じように、高校生が先生らの中で寝ている人おるやんか、ということを言われました。こんなに一生懸命やっとなのに先生あんたらは寝るといふ思いを持って頑張っていく高校生が同じ松阪に居て僕たちも子どもたちといろんな形で直接的にはなかなかできないんですが、頑張っていきたいなって思っています。そのことをこの徳島の高校生達にも伝えたいなと思って発言させてもらっています。神戸のお父さん、そんなふうにもいろいろな事情あるんやって怒ってもらって声かけてもらってありがたいなって思います。僕も午前中後ろで座っている人がでとるのを昼からみての人達はどんな思いで帰って行ったのかなあ、自分達の学校のそこまで行けないけどたいへんやなあっていうだけで帰っていったんかなあそんなやつたりますます現場でいろいろ同和教育広がっていきにくいんちゃうかなあ、って思いながら聞いていました。先ほど奈良の先生言われたんですが、お

みやげ買うそういうことは実は来年三重県で全国大会があるんですが、ぜひともそういうことは他の時にやっていただいて、最後まで分科会に参加していただいたら、元気の持てる話だし、頑張ろうっていう気になりますので、ぜひとも最後まで、いろんな事情はあると思いますが、そういうことで参加していただけたらと思います。僕なんかときどき早く帰りたいなって思う5年生担任なんです、明日も休みをとりました。子どもたちには同和教育の研究してくるって言ってあと職場のみんなに深く頭下げてすみませんお願いしますって出てきて、何の心配もしていないんです。安心して出てきているつもりです。で、4時ぐらいに帰ったら、あああの先生いつも遅いんですよ、今日ぐらいはよう帰って声かけてもらえる人間関係作って行きたいとか、そんなことどうにかしていかなあかんのとちがうかなあって思いました。

それから5年生で、山下先生の発表を聞きながら、6年生の部落問題学習につなげるのには5年生どんなふうにしていかなあかんのかなってそんなことばかり考えながら聞かせていただいていたんですが、奈良のお母さんの発言とか、さっきの高校生の発言を聞きながら、やっぱしどっかに怒りとか、こだわりとか持ちながら、がんばるとる人がおるんやなっということが実感できて、僕もまた三重県に帰ってがんばらなあかなあって実感が持てました。できました。ありがとうございました。

(Kさん)

全体的な取り組みのことで出てたんで、ここで一つ残念なことがあったことを報告したいなと思うのは、昨日の帰り、質問した人が3人いて、その方の質問をこの会場で絶対受けるから来てください、と司会の方が言っていたんですが、その人達のお話を何も言わないで、言いたい人がいたんですけれど会場に来たら帰ったんですね、だからそんな取り組み方が、今も高校生を受付で、門前払いしたり問題を感じましたので、その約束したことを責任持つっていうか、後でしょうと思っていたのかも知れないんですけれど、朝の人が、保障されてたということでおいでしていたのに帰られたことをぜひとも伝えたいなと思いましたのですみません。

(徳島県 富加見)

何を言いたいのか充分まとまらないんですけれども、先ほど、部落の子が学習の場でつらい思いをということの意見があったと思います。うちの中学校も、先ほどから発表させていただいたんですけれども、今本音でしゃべれることがやっと基礎固めができたところでまだ本当に出来上がっているわけではありません。ほなけども、90年以前の学習見たときに、部落外の子がほんまはもっともっと自分の問題としてこの解決のために頑張っていかなあかんのやけどもどんな方法があったんか、一生懸命その答を先生も考えたんです。ところが答が見つかってない。そんな現実がありました。今もやっぱりそうなんです。多くのことを語れるけれどもそうでない子がおる。また先ほど発表があったんですけれども、部落の生徒たちも仲間の発言によってやはり感性を動かされて、発言していく、そういうような状況もまだまだあります。全部の生徒の立ち上がり、全ての生徒がっていうたらそうでない部分もありますけれども、結局その学習をしていく中で、部落外の子どもたちが何を感じていたか、それはこの間のふるさとの学習を見ていただいたと思うんですが、その中で板野町が差別されるというようなことがいっぱい出てきました。ほな板野町が差別されるっていうことはどういうことかって考えてみたらやはりそこに部落があるから、っていうふうな答が返ってくるんですね。ほな部落の人、一人一人が悪いから差別しよらんかっていうたらそうでない。ほなそこをもっともっと考えていかなあかん部分がいっぱいある。それと、部落が差別されとるということは、あなたはどこにすんどるのか。部落の子も部落外の

子も愛する板野町にすんどるわけです。学習の中でおとうちゃんやおかあちゃんの仕事のこと、いっぱい出てくるんですよ。お父さんお母さん好きじゃ一緒に頑張っている、一生懸命僕を育ててくれよ。ほなけど住所聞かれたときに、板野町ということで言いにくい部分がある。またある生徒は、おかあちゃんは部落外から嫁いで来て、結婚しておる。それでお母さんが言うんですね。おまえは部落外のおかあちゃんと、部落のおとうちゃんとそんな部分やっぱり知らされとる。だからおまえは部落の子でない。そういうこというわけです。そしたら学習の中で今までお父さんとお母さん非常に好きやった、ほなけど瞬間的にそういうお母さんは嫌いじゃ、やっぱり全体学習の中でつらいとか涙とかそういう時に出てくるんです。それは勉強していつてそのことがおかしいと感じるから語るんです。決して学習の中で、こういうこと語れ、ああいうこと語れという勉強でないんですね。自分達が一生懸命語る中でたとえお父さんであれお母さんであれおかしいことはおかしいと語るような学習になってきよるんです。ほなもつと考えたらそういうお母さんをそういうことを言わせる社会構造は何なんだ、そこにやっぱり気づいてきよるんです。ほなけどまだまだそういうことまで子どもたちが到達できておりません。うちのこれからの課題であるし、ところが全体学習することによって、多くの意見の子どもたちが本音をぶつけることによっていろんな場面が見えてくるんです。先ほど地域教材、言いよつたんですけれども、板野町も歴史的にどうしてここに部落が作られたかっていうことも、我々もほんまに知りたいですけれども、明らかになっておらん現実もあります。丸岡忠雄さんのふるさと勉強しよるときに、丸岡さんの思い掴むと同時に、じゃあ、板野町は、丸岡さんの生まれたところじゃなくて、今度は自分の生まれた板野町はどんなだ、これから先、ほんまに板野中学校にとってはふるさとを語ること板野町を語ること 自分のとうちゃんかあちゃんの思い語ることが子どもに取っても我々に取っても、ふるさと、地域教材を考えることになっていくんだと思います。それから学習会のことも発表させてもらったんですけれども、今学習会の会場が5会場あって、子どもたちが頑張つてそこに通うとるんです。1つの学級の中に多いところだったら10名くらいの子が一生懸命がんばつとるんですね、そしたら学習会を取り上げて、部落の子も部落外の子も、私たちの学習会というような思いをもって、地域教材でつながっていきよるんですね。今までは学習する中で1つの資料使ったら、資料から離れられん部分があったんです、国語の読みとりのように、この思いどうな、この思いどうな、って。そうじゃなくて、やっぱり自分たち自身を変えていくものは、これはやっぱり地域教材になっていくんでないかな、そんなふうに感じました。ちよつといろんな思いがありまして、まとまっていないんですけれども、またご意見お願いします。

(参会者)

どうしても言いたいので言わせてください。あの高校生の話、蒸し返して悪いんですが、1分だけ時間ください。よく聞くとと思うんですが、差別された者が、「これ、差別やないんか、おかしいんやないか。」思うて相手に言う。相手は「しらん、全くそんなつもりで言うてない。」ということありますよね。それでも具体的に動作じゃなくても、言葉じゃなくても、差別じゃないかと思うことありますよね。就職でも、結婚でもいろいろあるじゃないですか。そのときに相手に聞いたら「そんなつもりじゃない。」って言いますよ。今の場合、今の高校生の場合、「教員は、先生はいろいろあるんじゃ、こんな事情があるんじゃ。それ分かれ。」それ言うんですか。現実を見た高校生はそれおかしいやないかと思うたんでしょ。じゃそれが正しいんやないんですか。じゃあ仕事は何をせなあかんのか。時間きちつと確保して、人数きちつと確保して、動員確保して、来年からきちつとした形で全部参加できるような闘いをするのが教員の仕事じゃないでしょうか。

(参会者)

先ほど徳島の女子校生の話を聞いていて、実は数年前同じような話を聞いたことがあるんです。言ったのは自分の学校の卒業生が、高校の授業についていろいろな思いを中学校に帰ってきて切々と語ったんです。うちの学校の卒業生はそういう生徒もおれば、地元の新聞社に投稿して自分が勉強してきた中学で勉強してきたことを同和問題について学んできたことについて、いろんな思い考えながら変容してきた自分をぜひそんな教育をどんな学校でも続けてほしいと訴えています。違う生徒ですが、中学校で勉強してきたことを団結を捨てたくないと言う思いで今も週に1回みんなで集まって思いを語りながらみんなで頑張ろうねというような取り組みをすすめるの会と称しておりますが、そういう活動をしている生徒もおります。そういうすばらしい、と言うと語弊があるかも知れませんが、すばらしい生徒がおる反面、そうでない生徒もいっぱいおるんですね。先ほど板野中学校のレポートにもありましたが、現実をしっかりと見つめ誰もが部落問題を自分の問題として捉えと書いてあるんですが、自分の問題として捉えられない生徒がたくさんいるんですね。それが今僕は一番苦しんでいるんです。そのため我々は何をすればいいのかなあということ、ぜひ昨日今日の報告の中で勉強したかったんですが、自分には見えなかったです。自分の力不足のせいかも知れないですが、見えなかったのでぜひ教えてほしいんですが、視点を変えてものを言わせてもらいます。あの先ほど大阪の先生、山下先生のお話を聞いていて、もしくは、大阪の先生のお話を聞いていて、現状を正しく見つめる力、胸を張って生きていく力を育てること必要性は充分分かったので、その視点で今後勉強をしながら取り組んで行きたいと思ったんですが、僕が先生方の話を聞いて一番疑問に思ったことは、しんどい位置にいる良一君がおるんですね。その良一君が涙を流してしまったり、先生に言いにくかったり、自分の世話がたよりないそういう姿があるために周りからいじめられるんですね。僕はその良一君に胸張って生きる力を育てることも大事だと思うんですが、周りの生徒が、なぜそんな泣いてしまう良一君の一面を捉えて、そんないじめをするのか、周りの生徒の方が許せないですね。正直言って僕言われるかも知れないですが、女子校生の訴えは僕は余りいい思いがしないです。僕は一生懸命勉強したいと思ってここにいるんですね、帰った先生もいるかも知れないですけど、そういう先生の姿を捉えて、おまえらはほんとに自分の問題になっとんかという言い方をする事についてはぜひ高校生たちも自戒をしてほしいなと思います。もちろんそういういい加減な先生に対して同じ思いである僕たちも自戒しながら反省しながら次の取り組みを考えていきたいと思うのですが、常に相手を責めることしかできない、相手に何かをもとめることしかできないのであれば、仲間は増えていかないですね、仲間を増やさないと、絶対続けられない問題だと思うんですね。だから仲間を増やすにはどうするのか、一生懸命訴えることも大切だと思うんですが、それ以上に一生懸命頑張ってくれようとする人の思いというのも聞かせてほしいと思うんですね。そういう歩み寄りが無いのに、人にあたっても解決しないと思うんですね。

話を戻しますが、周りの人達に、どうやってその人たちに自分の問題として取り組む、考えられる、かっていう切り口を見つけたかったんですが、教えてほしかったんですが、私の学校は2番目に大きな対象地域があります。1000名を越える生徒がおるんですが、対象地区から通っている生徒は各クラス10名程度なんですね。総括して30人程度のその子たちを取り囲む周りの子たちは、先程も言われましたけど根強い偏見や意識を持っているんですね。その子たちにどういうことを考えてほしい、ということをお私たちの学校では取り組んでいるんですが、なかなか理解してもらえない。先ほど奈良のお母さんの意見を聞いて何のことはない、自分自身がその周りの人間だったんだと、いま、頭をたたかれたような思いでちょっと落ちこんでいるんですが、立

ち上がってまた頑張っていきたいと思いますので、ぜひ、子に生きる力をつけてあげると共に、扉の見える周りをどうやって変えていくのかということについての視点を、これからの話でも、ぜひ教えていただきたいし、奈良の方の報告も取り入れていただけると勉強できるんじゃないかなと思いますので、ぜひよろしくお願いします。

（徳島県 山口）

先ほど奈良のお母さんからのお話で、ずっと自分が情けないという思いでいろいろ考えていたんですが、私、午前中に板野中学校での取り組みについて言わせていただいたんですが、決して板野中学校の生徒全部が、ここの高校生のように力を持っているわけじゃないんです。昨年、ずっとうつむいたまま、部落問題学習になるとずっとうつむいたまま顔を挙げられなくて、そのまま卒業させた生徒が自分のクラスにいます。そのことをまるで忘れていたかのように、自分がいかにやってきたかと午前中言って、今自分がすごく情けない思いがしています。昨年度の取り組みを振り返ると、私は、仲間の思いにつなげよう、仲間がこれだけ頑張っているんだから、仲間を信じてつながろう、つながろう、それを子どもたちに一生懸命訴えました。信頼に応えるんだという形で子どもたちに発言を促したんですが、友達が、仲間が、熱い思いで涙ながらに訴えるのと、誰もがそれをきちんと受けとめ、熱い思いになってくるんです。すごく熱くなってくるんです。で、仲間のために頑張ろうってすると、卒業していったその仲間がいなくなったときに自分の中にその燃える火がないんです。高校にいった、ここに、この後ろにいる高校生のように、ずっとそういう仲間がそばにいて、ずいぶん頑張れる子はいいんですが、卒業してそういう仲間が周りにいなくなる、自分は友達の信頼に応えるために発言を続けてきた自分の中には何もない、それが高校にいったつぶれていく、何もしやべれなくなる、ということになるのではないのでしょうか。去年の取り組みを振り返ってみて、私は自分の中に燃える火を作らなければ絶対ダメだということ、一人になっても頑張れる力を作らなければダメだということを実感しました。それがどうやってできるか、一人の取りこぼしもなく、うつむく生徒がなく、みんなが自分の問題として、きっちり捉えられるにはどうしたらいいのか考えたときに、部落出身であろうが部落出身でなかろうが、その心の中にはいつも人をしいたげて、人の生きる力をもぎ取って、誰かを下に見る、自分より以下を求める心がある限り、この問題はずっと自分の心の中にあると思うんです。今年、私が子どもたちの前で一生懸命言いたいことは、自分の心の中に自分より下を求めて、人の生きる力をもぎ取って人をしいたげて生きる生き方、その心が、部落問題を残してきたんだってことに気がついてほしいということなんです。それを、私は今年1年生を担当させてもらってますので、今年度からの取り組みで、この子達を決して高校に行ってもつぶれる子にはしたくないと思っています。

（徳島県 吉成）

たびたびすみません。板野中学校の吉成です。

頑張りがきていない子をどうすれば頑張れるように少しでもさせていけるのか、ずーっと悩み続けてきたことです、私も。つい最近になって、新たな試みとして、全体学習をしよりますけれども、その中で、グループ学習を中に取り入れた形でやってみようか、そんなことをつい最近とりあえずやってみました。どういう形になるか分かりませんが、また、「峠を越えて」に今年のまとめとして載せようと思います。興味のある方はまたご一読ください。以上です。